ネプギアと
違法コロシアム
R18

「ここが……コロシアム……」

プラネテューヌ郊外にある小さな街。

その地下には非合法の試合が行われているゲイムギョウ界の闇、違法コロシアムがあった。

巧妙に法の穴を突いた仕組みで時間を稼がれ、摘発の準備を整えているうちに別の国へ移転してしまう。

その手口は狡猾で大胆だった。

資金力も底が知れないことから、どこかの権力者と繋がっている可能性も高いとされている。

そんな違法闘技場に、女神候補生であるネプギアが一人で足を踏み入れようとしていた。

「ようやく掴んだチャンス。みんなのためにも、絶対に黒幕を捕まえなくっちゃ」

事の発端は、犯罪組織による違法ツールの大量配布だった。
女神のシェアを奪い、人々を堕落させる違法機器。そんなものをばらまかれたら女神たちはひとたまりもない。
すぐに四つの国は連携し、規制強化と出処の調査が始まった。
単価の高い機器だ。大量に用意するには当然大きな資金が必要になり、足が付く。
国の監視を逃れて大金を稼いでいる組織。心当たりがあるとすれば、違法コロシアムだけ。
そう断定し、女神と教祖が本腰を上げて全力でコロシアムの足跡を追い……ついに諜報部が紹介状を入手した。
そのような経緯で、ネプギアが潜入任務に赴いたのである。

「失礼します……ここでお金が稼げるって、聞いてきたんですけど……」
「紹介状を確認いたします」
緊張しつつも、平静を保って手続きを進める。
簡単に変装はしているが、正体がバレてしまったら一巻の終わり。
「問題ありません。それではこちらの同意書に拇印をお願いします」

「はい」

朱肉をつけ、親指を紙に押し付ける。

同意書には長々と文章が書かれていたが、要約すると『どのようなことがあっても当施設は責任を負いません』とのことだ。

受付の女性は拇印を確認後、選手用のIDカードを差し出した。

「あなたの選手番号は29番。選手控室はあちらになります。基本的には自由にして頂いて構いませんが、オーナーからの指示には必ず従うようにしてください」

「わかりました。ありがとうございます」

ネプギアは丁寧にお辞儀をし、控室へと進む。

施設内はかなり綺麗で、正規の闘技場と言われても違和感がない。

控室にたどり着く。

ドアの横のセンサーにカードをかざすとカチリと音を立てて鍵が開いた。

部屋の中は清潔で、ソファやベッドも置いてある。冷蔵庫の中には飲み物もあった。
（さすがにここの飲み物は飲まない方がいいよね）
一見まともな部屋だが、違法な組織の運営する危険なコロシアムの控室。
監視されている可能性も考え、大人しくソファで座って待つことにした。
それから数分経って、ドアがノックされた。
「あっ、どうぞ」
「失礼します。オーナーのコンベルサシオンと申します」
「はい。よろしくお願いします」
ペコリと頭を下げるネプギア。
（この人がオーナー……とはいえ、黒幕はもっと奥にいるはず。この人だけ捕まえても意味ないよね）
コンベルサシオンと名乗った男は、フードを深く被っており、表情も見えず胡散臭い。
警戒しながら次の言葉を待っていると、彼は手に持っていた黒い布を差し出してきた。
「これは……？」

「ここでは、この特殊スーツを身に着けて戦っていただきます」
「特殊スーツ？」
コンベルサシオンがスーツを広げて見せる。
「えっ……」
思わず声を上げてしまう。
それは、ネプギアの――パープルシスターの、変身時のボディスーツを模したデザインをしていた。
大きく異なるのは、白い部分は黒く、青い部分は赤く、色を反転させたような不気味なカラーリングになっていること。
そして材質は安っぽく、触ってみる限りはただのボディスーツのようだった。
ネプギアは自分の正体に気づかれたのかと身構えたが、コンベルサシオンは軽い口調で説明を続ける。
「当施設では余興の一環として女神のコスプレをしていただいております。当然ですが、スーツにはなんの効果もありません」
「あ……なるほど、そういうことなんですね……」

ここは違法闘技場。女神に思うところがある人が客として来ているのだろう。そして挑戦者に女神のコスプレをさせて鬱憤を晴らしている。趣味は悪いが、意図は理解できてネプギアはほっとした。

「では、ご健闘を。４回勝ち抜くことで賞金が与えられます」

「はい、頑張ります」

コンベルサシオンはそれだけ言って去っていく。

退出を確認すると、ネプギアは隠しカメラを警戒しながら偽プロセッサユニットを着た。

（あとは、この小型カメラで試合の様子を撮れば証拠になる……）

こっそりと耳元に小型カメラをセット。

髪の毛のおかげで目立たないため、試合中に気づかれることはないだろう。

念のため鏡で確認したところ、カメラは全く見えなかった。

それはそれとして。

「……ライラックって、普通に着るとこんな感じなんだ……ちょっと恥ずかしいかも……」

どちらかといえば、着ているスーツの方が気になってしまう。

衣装は胸の谷間を強調し、太ももを露出する大胆なもの。ボディラインが丸わかりのぴっちりとした素材も相まって非常に煽情的な見た目をしている。ネプギアはそれなりに胸があるので、激しく動くと結構揺れる。

また、本物と違ってかなり角度がついているのも恥ずかしい。

「変身してると気にならないんだけどなぁ……」

改めて鏡を見る。黒と赤の偽ライラックを身につけた自分の姿は、ほぼパープルシスターだった。。

「……この格好で私の正体が気づかれたりなんてこと……ないよね？」

候補生の顔まで知っている国民はそう多くはないので、バレないことを祈るしかない。

姉ですら街中で女神と気づかれなかったことがあるのだから。